

国内研修で、私は地域復興の現状を体感するという目的で同じ学科の友人と二泊三日で長崎に行かせていただきました。

初日は、佐世保で少し観光を楽しんだのちに五島列島のうちの一つである小値賀島に行きました。小値賀島は、「おぢかアイランドツーリズム」という特定非営利活動法人の方々が観光を通して小値賀の魅力を伝えるため、小値賀のワンストップ窓口として、観光のご案内から、自然体験、民泊、古民家事業など、旅を総合的にプロデュースされています。今回は、その地域再建の一部を体験しようということで、古民家レストランで夕食を食べ、古民家ゲストハウスで一泊しました。当日は天候が悪く、予定していた高速船がすべて運航中止となってしまう、かろうじて最終便のフェリーで島につくことはできたのですが、予定していた時間から4時間ほど遅れてしまったにも関わらず、おぢかアイランドツーリズムの方も古民家レストランの方も嫌な顔一つせず出迎えてくださって、小値賀島の方々の温かさを初日から体感しました。古民家レストランでは、キジハタ、マグロ、寒ブリのお刺身盛り合わせをはじめ、島ならではの新鮮な魚介を使用した海鮮料理が盛りだくさんで、とても満足度の高いものでした。また、食事のあとは古民家ゲストハウスまでレストランの方が車で送ってくださって、サービスの充実さに驚嘆したのはもちろん、食事処と宿泊先が連携しているからこそのこのサービスは、おぢかアイランドツーリズムが旅を総合的にプロデュースしているから実現できているのだと思いました。古民家ゲストハウスは、思っていたよりもかなり広く、キッチンや冷蔵庫もあり、テーブルなどもたくさんあって、5人で泊まるにはもったいないほどでした。古民家というと古そうな、汚そうなイメージを抱きがちだと思うのですが、掃除もしっかり行き届いていて、建物としても老朽化しているという印象は全くなく、でも日本の古き良き雰囲気というものはしっかり残っていて、古民家を快適に体験できるように感じました。

翌日は、レンタサイクルで島を(一部ではありますが)観光したあと、おぢかアイランドツーリズムの前田敏幸さんにお話をお聞きしました。レンタサイクルは、6時間500円(電動自転車は1000円)で借りることができ、小値賀島は面積が約12km²しかない小さい島なので、数時間だけでも何か所も観光スポットを回ることができました。せっかく島に来たので、私たちは海の見える場所を重点的に回ったのですが、どの場所も自然豊かで、海の水もきれいで、人もそこまで多くないのでゆっくりと観光することができました。また、自転車を漕いでいる時に出会った町の皆さんが挨拶をしてくださるのが印象的でした。そして、そのレンタサイクルのあとにおぢかアイランドツーリズムの前田敏幸さんに小値賀島の強みやまちの復興事業をする際に苦労したこと、今後の課題等について質問させていただきました。一口に五島列島とはいっても、それぞれの島に独自の文化や雰囲気があって、小値賀島は、江戸時代の五島列島の大半が福江藩(五島藩)五島氏の領地だったのに対して小値賀島とその属島は平戸藩の領地だったのもあり、多く外国のものや文化が入ってきていたので、五島列島の文化の中心だったため、現在もなお新しいものや多様性を受け入れる文化が受け継がれているとおっしゃっていました。だから、観光業を始めようとした際もそこまで反対の声

は上がらなかったといえます。しかし、本業(漁業、農業)をやりたいと強く思う島の住民も多く、なかなか観光業に積極的に取り組んでくれない人が最初は多かったといえます。そのため、おぢかアイランドツーリズムの職員が一軒一軒回って話をしていたそうです。また、現在の課題としては、やはり若い人が高校から島を出てそのまま帰ってこないことなどもあり人口の減少が進んでいるとのこと。その対策として、年に数組移住する人を受け入れていて、そのほとんどは、観光や仕事等で小値賀島を訪れて、良さを知って、自ら希望して移住してくるそうです。また、色々なマスコミの人が取り上げたいと取材の依頼をしてくれませんが、方針として本当の島の魅力を伝えてくれる雑誌やテレビ以外は拒否しているといえます。また、やや島の復興のためのまちづくりという点からは離れてしまっていますが、個人的に日本史が好きなので、2日目のレンタサイクルで地ノ神島神社を訪れた際に見つけた、野崎島の神道と潜伏キリシタンの関係性についての立札のようなものの内容が気になったのでそれについて質問させていただきました。そもそも野崎島とは、小値賀町は17の島々で出来ているのですが、その中の本島である小値賀島東端の2キロ東に位置している島です。野崎島は、島の北部に立地する沖ノ神嶋神社が海上交通の守り神として広く崇敬を集め、神道の霊地として一般の人々が生活を営むことのできない島でした。19世紀までに人が居住していたのは、神官の屋敷を中心とした島の東岸に位置する野崎集落の1箇所に限られていて、19世紀の中ごろになると、外海から各地を転々とした潜伏キリシタンが移住していきました。潜伏キリシタンは、険しい斜面を開拓し、広く崇敬を集める神社の氏子となって表向きは神道への信仰を装い、指導者を中心にひそかに自分たちの共同体を維持しました。野崎島には、潜伏キリシタンに限られた状況の中で既存の社会や宗教と共生しながら信仰を伝えた伝統があるそうです。このような内容の一部が地ノ神神社の立札のようなものに記載されていました。ちなみに、野崎島は、2001年に最後の住民が離村したことにより、現在はほぼ無人島となっています。私個人のイメージとして日本の神道や新興宗教は信仰するのにもかなり厳しい条件が課されるものだという固定観念があったため、キリシタンが神社の氏子を装って潜伏するというようなことが本当に成立していたのか、本当の信者たちには正体がばれていなかったのか、その2つの集団が共存していたのか、という疑問が浮かんだため、それらについて質問しました。回答としては、本当に氏子として完璧に潜伏していて、神道の信者たちが公認していたわけではないということでした。しかし、うすうす気づいてはいたものの、先ほどにもあった通り小値賀島には新しいものや多様性を受け入れる文化が根付いているので、見逃していたのではないかと前田敏幸さんはおっしゃっていました。私は、この歴史からも現在の小値賀島の文化がうかがえると思いました。

また、三日目は出島に行き、出島の職員のスターツ未来さんに出島の復興についてのお話をお聞きしました。まず、復興にあたり基本方針として昔あったという確かな証拠がないものは展示しないと聞き、非常に驚きました。手軽に観光客の方々を喜ばせるなら、出島らしいものや日本らしいものをたくさん展示すればいいとは思いますが、それでは出島の復元とは言えない、とおっしゃっていました。だから、例えば出島と本土をつなぐ橋は明確な史

料が見つかっていないため、あえてかなり現代的なデザインを採用しているそうです。実際に見ましたが、確かに出島のほかの雰囲気からはかなり浮いていて、他の実際にあったものを復元している建造物との差別化を図っているのは一目瞭然でした。その方針もあり、1951年に復興に着手し始めたものの、そもそも元の出島の土地に住んでいる人に説明して退去してもらう作業、そしてその土地から出土したものの検証に時間がかかるため、まず1990年に表門を復元できるまでにかなりの時間を要したそうです。その後の復興も、同じ行程を繰り返すので膨大な時間がかかり、現在もなお復興途中とのこと。今後の目標は、事業開始から100年が経過する2050年までに再び海に浮かぶ出島が完成すること、そのためにまず、まだ復元未定となっている西側の復興を進めることだということです。私自身、出島のイメージは中学校や高校の教科書に載っているような海に浮かんでいるものだったため、今回初めて出島を訪れてみて陸と繋がっていることに驚きと違和感を覚えたので、早く江戸時代とほぼ同様の姿まで復元させるといいな、と思いました。

今回、長崎の二つのまちづくりについてのお話を聞いたり体験したりして、共通して見えてきたのはどちらも地域復興への活動方針や方向性がはっきりしている、ということです。ただ観光客を増やすため、観光客を喜ばすためにまちをつくっているのではなく、まちとしての誇りをもって復興事業を行っているところが一番印象的でした。もちろん、短期的未来に数値として成果を出すなら観光客の目を引くような、話題になるようなことを企画した方が良いのだとは思いますが、どちらの方々も長期的な未来を見据えて取り組んでいらっしゃるの素晴らしいと思いましたし、私自身の地域復興への見方もかなり変わりました。